

読むと妙に納得してしまうから不思議である。

最近、キリスト教に改宗した人と、信仰を持たないその友人との間の会話。

「そこで君はクリスチャンになったというわけだね?」「そうだよ。」

「では君は、キリストについてたくさんを知っているにちがいない。話してくれたまえ。彼はどの国に生まれたの?」「知らないよ。」

「死んだとき何歳だったの?」「知らないよ。」

「彼がした説教の数は幾つ?」「知らないよ。」

「君はキリスト教徒になったけれど、キリストについてほとんど知らないんだな?」

「そのとおりさ。キリストについてほとんど知らないことが恥ずかしい。でもこれだけは知っている。三年まえ、ぼくは酔っぱらいだった。借金があった。ぼくの家族はばらばらになってしまった。妻と子供は、毎晩、ぼくが家に戻るのを怖がっていたんだ。」

でも今、ぼくは飲むのをやめた。借金もない。ぼくの家はしあわせだ。子供たちはぼくの帰りを毎晩とても待ち望んでいる。これはみんな、キリストがぼくにくれたんだ。ぼくはキリストについて、このこ

*常に追われている自分が立ち止まってはつと我に返るとき *今日の聖書と今日の説教の話は何だったわけ?

入門講座もここまでくると、皆とても率直でありのままを分かち合ってくれる。模範解答では決してないが、それがいい。それでいい。

生涯もつとも印象に残っているミサはどういうときにどこであずかったどんなミサか? ある老婦人が話してくれた答えが忘れられない。

*バチカンであずかったミサの平和の挨拶の時にひげずらのヨーロッパ人男性から抱きしめられちゃった *私たちの結婚記念日の日のミサで神父さんが突然祭壇からおりてきて、私たちを祝福してくれた。よくぞおぼえていてくれたと感激した

元氣の出るミサというのはどういふのかな?

*聖歌隊がへたくそで、これは歌わねばと大声で聖歌を歌ってしまったミサ *両形態でおん血をたっぷり飲めたミサ

と、これはお酒の好きな男性。何を考えているんだ。*お説教がとてもいい話で励まされたとき。逆にできそうもないことばかりすすめられたときはどっか

とだけは知っているんだ!

ほんとうに知ることは、知っていることよって人間が変わることです。(アントニー・デ・メロ著『小鳥の歌』谷口正子訳 女子パウロ会 より)

●「ミサ」をテーマとする集い

この集いでは、ミサの次第やあずかり方を説明するのだが、次の問いかけがよい。これも洗礼を受けている信者の存在が必要である。

「ミサにあずかっているときには心の中はどうなっているのかを分かち合ってほしい。何を考えているのか、何を祈っているのか?」

*過ぎ去った一週間の振り返り、来るべき一週間を思いめぐらしている *今日はあの人に来ていた。

あの人は最近見えないけれどどうしているのかな?

*今晚のおかず、何にしようか? *あの子は元気で、大きくなったな。あの子はとても退屈そうだ。無理もないや *もうじき定期試験だ。試験の勉強をしなくちゃ *あのとときはまずかつたな。みんなに迷惑をかけちゃった。どうおわびをしようか

*私が活けたあの祭壇の花、結構いい線いっている

と重荷を負わされた感じで疲れる

*となりに座っていた、顔はよく見るけれど、名前を知らなかった人と挨拶をして知り合えたとき

●と、こんな具合に講座は展開する

信徒が担当する入門講座というのはどういう特徴があるのだろうか? 私にはよくわからない。もちろん司祭やシスターが担当するものや、伝統的な「公教要理」にもそれぞれ良さがあることは否定するつもりはない。それは担当者の個性であって、司祭だから、あるいは信徒だからという特性はないのかもしれない。

「罪とゆるし」や「愛と性」あるいは「生と死を考える」というテーマでも、もつと分かち合いたいことはたくさんあるが、ここで紙面が尽きた。私の講座は、飛び入り、冷やかしのぞき見など歓迎している。あとは直接参加していただくか、あるいは講座のテキストを注文していただくかしかない。

いつか、インターネットの双方向性を活かして、こういう入門講座が展開できないだろうか、と構想している私である。 [おわり]

(つちや・いたる/清泉女学院中学・高等学校教諭)